

令和 2 年 6 月 25 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02918

研究課題名(和文) 英語副詞辞(Adverbial Particles)の第二言語習得研究

研究課題名(英文) Second Language Acquisition of English Adverbial Particles

研究代表者

奉 鉉京 (Bong, Hyun Kyung)

立命館大学・国際関係学部・教授

研究者番号：50434593

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、副詞辞がない言語(日本語・韓国語)を母語とする日本人・韓国人にとって、その習得が難しいとされる英語副詞辞の第二言語習得研究を行い、徹底的に「習得難易度」「発達順序」「中間言語」「母語役割」「習得可能性」「学習可能性」などを明らかにした。同時に、英語の副詞辞と句動詞の統語的・意味的特性(Lemmatic Properties)を考察する理論研究を本格的に行った。副詞辞を選択しない言語(日本語と韓国語)の複合動詞や助詞の統語的・意味的特性も綿密に考察し、英・日・韓の対照理論研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ミニマリストプログラムの素性基盤を取り入れた副詞辞と句動詞の統語的・意味的性質の分析を行うことにより従来の「統率・束縛理論」で扱えなかった副詞辞と句動詞などの第二言語習得にメスを入れることが出来る。既存の習得研究の流れの基本的な見直し出来る道標になるだろう。さらに理論研究と習得実験研究を連携させ、既存の理論研究と習得研究の流れの基本的な見直し出来る。本研究は、停滞している副詞辞の理論研究と習得研究の先駆けとなるに違いない。

研究成果の概要(英文)：Both Japanese and Korean-speaking learners (JSLs, KSLs) seem to find it difficult to master English Phrasal Verbs (PVs, e.g. put out, take after, come up),. Attempting to answer these questions on differential difficulties or on variability in L2 acquisition of English PVs, the experimental study has been carried out with both JSLs and KSLs. The results from the experimental study and theoretical test do not support the claims of the single unit hypothesis driven from Armstrong's study (2004). In addition, the study insights into what semantic and syntactic properties related to English PVs (more specifically, verbs and particles) are more difficult for JSLs and KSLs than others, discussing pedagogical implications for English language learning/teaching: e.g. increased awareness of and proficient knowledge of both syntactic and semantic (lemmatic) properties of PVs will make English language teachers not only more effective but also successful with pedagogical strategies.

研究分野：第二言語習得研究

キーワード：英語副詞辞 第二言語習得 習得難易度 Lemmatic Properties 母語役割

## 1. 研究開始当初の背景

英語の副詞辞(adverbial particles)の研究は理論的にはいまだ分類の段階にある。英語の句動詞を構成する副詞辞はどのようなものがあるのかの分類のレベルにあり、なぜそのような分類・分布になるのかを探るといふ問題意識が乏しい。

副詞辞の統語的特性は前置詞と同じ語形であるが、統語的に異なる範疇類になっている：(a) [John ran up the big bill.]における up は副詞辞であるが；(b) [John ran up the hill.]の up は前置詞である。

一方、副詞辞の意味的特性の研究からは、例えば、Taylor(2002)は句動詞の意味は動詞と副詞辞の意味を合わせるにより個々の意味を喪失し、新しい意味を持つ語彙と分析している(認知的アプローチで別の句動詞の意味分析は二枝(2006)を参照)。

反面、ミニマリストの素性基盤(feature Matrix)を取り入れ、申請者(奉 2009, 2011)と分担者(加藤)は句動詞の多義性と副詞辞が意味形成に重要な役割を果たすと主張している。特に英語の副詞辞と句動詞の意味的特性と統語的特性は複雑な相互関係を分析やその分類の一般化・効率的な記述する本格的な研究が必要である。

第二言語習得研究と連携した理論的考察はないのが現状である。語彙目録(Lexicon)に副詞辞を選択する言語(Danish, English)と選択しない言語(Swedish)がある(Radford 2005)。日本語と韓国語には複合動詞(動詞+動詞)構文はあるが、副詞辞を選択しない言語であり、それを母語とする学習者にはその習得は非常に難しい(奉 2015)。

しかし、どの副詞辞用法がより難しいのか(習得難易度)、どのようなタイプの副詞辞構文がより習得しやすいのか(発達段階)、副詞辞を選択しない母語(日本語・韓国語)の複合動詞構文の意味的・統語的特性は第二言語習得辞にどのような役割を果たすのか(母語役割)などをテストする習得研究はない。このような研究課題を徹底的に追及する「母語には無い副詞辞・句動詞の第二言語習得研究」が必要である。

この研究の原動力となったのは、英語教育の現場から、日本人の英語発話や作文を添削の際、副詞辞を使いこなせていないことや誤った熟語的表現を使っているが、エラーが体系的であることを発見した。英語副詞辞は前置詞と副詞と共通な語であるため、英語教育用教材においてもどちらかに副次的に説明され、習得研究や英語教育においてその研究領域が限られ成果が非常に乏しい。さらに、前置詞の研究でミニマリストプログラムの素性基盤(Feature Matrix)を取り入れた統語的・意味的特性の分析(奉 2009)が英語副詞辞にも応用可能であることに着目した。結果、副詞辞の理論的研究と習得研究の連携の必要性和、その成果を英語教育へ応用が必要であると痛感した。

## 2. 研究の目的

本研究は、副詞辞がない言語(日本語・韓国語)を母語とする日本人・韓国人にとって、その習得が難しいとされる英語副詞辞の第二言語習得研究を行い、徹底的に「習得難易度」「発達順序」「中間言語」「母語役割」「習得可能性」「学習可能性」などを明らかにする。同時に、英語の副詞辞と句動詞の統語的・意味的特性(Lemmatic Properties)を考察する理論研究を本格的に行う。副詞辞を選択しない言語(日本語と韓国語)の複合動詞や助詞の統語的・意味的特性も綿密に考察し、英・日・韓の対照理論研究を共同で行う。

理論研究の観点からは、英語の副詞辞と句動詞の統語的・意味的特性記述の課題(Research Questions)は、英語副詞辞の統語的・意味的素性の選択・構成・分布がどのようになっているのかを明確に記述する；英語句動詞の意味解釈において、副詞辞と共に起る動詞または前置詞句が果たす役割が其々何であるかを記述する；副詞辞を選択しない言語である日本語と韓国語の複合動詞や助詞等の分類や分布を考察し、意味的・統語的特性を明確に記述する。

一方、第二言語習得実験研究の観点からは、実験研究を通して、英語副詞辞の第二言語習得研究課題(Research Questions)を明確に説明する事を目標とする：

### (1) Differential Difficulty (習得難易度) - Developmental Order(発達順序)：

- ・ どの副詞辞構文が習得しやすい(easier/earlier)のか？；
- ・ どの副詞辞用法が習得し難い(difficult/later)のか？；
- ・ 副詞辞の統語的特性と意味的特性に基づく分類と分布図はどこまで説明できるのか？

### (2) L1 Role (母語の役割) - Mental Representation(心的標示)-Interlanguage (中間言語)：

- ・ 副詞辞を選択しない二つの母語、日本語と韓国語とで、習得への影響に違いはあるのか？；
- ・ 母語の複合動詞は第二言語の英語句動詞習得にどのような役割を果たすのか？；
- ・ 副詞辞の分離や語順などの統語的特性の習得に母語はどのような役割を果たすのか？

### (3) Learnability (習得可能性) - Nurturability (教育に基づく学習可能性)：

- ・ 母語に無いとされる範疇である副詞辞の習得は可能なのか？どこまで可能なのか？；
- ・ 教育により学習された副詞辞の意味・統語用法は定着可能なのか？どこまで可能なのか？

### 3. 研究の方法

理論研究の観点からは、具体的な研究対象は英語の副詞辞習得 統語的・意味的分類を考慮に入れた研究対象選別を行った。対象言語である英語は **Lexicon** に副詞辞を選択する：**about, across, along, around, away, back, by, down, in, off, on, out, over, past, round, through, under, up**）。一方、第二言語習得者の母語（日本語・韓国語）は副詞辞を選択しないが複合動詞構文がある。英語副詞辞の統語的特性による分類と英語副詞辞の意味的特性による透明性に基づいた分類を提案した。

#### (1) 英語副詞辞の統語的特性による分類を提案

- ・ **The fireman put out the fire. -> The fireman put the fire out. (Separable)分離**
- ・ **Laura takes after her father. -> \*Laura takes her father after. (Non-Separable)非分離**
- ・ **Duncan came up with an idea. He took off. (Quasi-Intransitive)疑似自動副詞辞**

#### (2) 英語副詞辞の意味的特性による透明性に基づいた分類を提案

- ・ **Lisa invited me out. Bring them in/bring in food. (Transparent)-調和類;**
- ・ **Dona used it up. Finish it up! Eat it up! (Aspectual)-中間類;**
- ・ **Egg on (けしかける、後押しする) (Abstract-Idiomatic)-拡散類**

この分類に基づき、第二言語習得の実験研究において、英語の副詞辞・前置詞の第二言語習得理論の検証を行った。第二言語習得理論研究の観点から、第二言語習得理論から派生する 2 つの仮説を検証するため、実験研究のデザインした：(i) **The Prototypicality Hypothesis**; (ii) **The Semantic-Single Unit Hypothesis**.

**The Prototypicality Hypothesis** は、認知言語学的アプローチから、プロトタイプに基づく分類を第二言語習得研究に応用された仮説である。プロトタイプ理論は、前置詞のような多義である範疇を意味の特性をプロト性の程度による階層的分類である。各々の前置詞は最もプロト性の高い意味(**most prototypical senses**)からプロト性のより低い意味(**least prototypical senses**)に区別される。前置詞の多義において、位置・場所を指す意味(**Locative senses**)と文字通りの意味(**Literal senses**)がプロト性の最も高いものとして分類されるが、抽象的な意味(**abstract senses**)はプロト性の最も低いものに分類される。このようなプロト性に基づく意味特性の分類を言語習得研究に応用したものが、認知的第一・第二言語習得理論である。その理論に基づく仮説である **The Prototypicality Hypothesis** は、最もプロト性の高い位置・場所・文字通りの意味がより早く習得される(習得しやすい)が、もっともプロト性の低いとされる抽象的な意味は習得が遅く、より習得し難いという仮説である。

本研究ではこの仮説をテストするために、実験研究を行った。さらに、この仮説における問題点を指摘した。例えば、英語の副詞辞は前置詞と同じ形態をしているが、この理論の適応が難しい。しかし、理論の説明的領域を適応すると、前置詞の多義性は、副詞辞の多義性にも関連するという類推が成り立つという想定の下で、プロト性の応用が可能であるが、そのように応用する言語習得研究は皆無である。

一方、副詞辞に焦点を当てた理論研究及び習得研究はなく、むしろ句動詞(**phrasal verbs**)の研究が盛んであるが、副詞辞の統語的特性は考慮に入れず、句動詞を一つの意味単位(ユニット)と見なし、習得研究に応用したのが **The Semantic-Single Unit Hypothesis** である。この仮説では、前置詞と副詞辞の分類はなく、動詞と前置詞・副詞辞の組み合わせを句動詞とみなす。第一言語習得研究では、句動詞が一つの語彙として無意識に習得される。習得の段階で動詞と前置詞・副詞辞の結合またはどの動詞がどの前置詞・副詞辞と結合できるのかも、無意識に習得される。単一意味単位という仮説は、潜在的に句動詞の生産性は全く無視されているが、第一言語習得ではその生産性が無意識に習得されるが、第二言語習得では出来ない、または難しいと予測する。なぜ難しいのかを説明するために、様々な分類や概念が提案されている。例えば、**Armstrong (2004)**は **transitivity and compositionality** という概念を取り入れ、句動詞を 3 つのタイプに分類し、第二言語習得の難易度を予測する仮説や英語の言語教授法を提案する研究がその一つの例である。本研究は句動詞の統語的特性をも考慮にいれ、単一意味単位仮説もテストするため、第二言語習得実験研究を行った。

実験研究には、被験者に英語運用能力の診断するため、**Oxford Placement Test (OPT, Allan 2004)**を導入し、実験研究のタスクとしては主な副詞辞 (**on, up, out, off, down, against, around, down, apart, and so on**)を含む 8 3 問の穴埋めテスト(**cloze test**)を行った。多くの例文は **Barnard (2013)**から抜粋したものである。実験研究の被験者は日本語母語話者が 33 名、韓国語母語話者が 40 名選別された。その選別には **OPT** の文法テスト結果(100)が 40 から 60 の被験者に制限した。同じレベルの英語運用能力を持つ被験者という制限を設けた。さらに、本研究のタスク(穴埋めテスト)は韓国語母語話者と日本語母語話者がどのように英語副詞辞を利用・運用するのかを考察するため、**Armstrong(2004)**が提案した様々な句動詞タイプ(**Directional, Idiomatic, and Aspectual**)を導入しただけではなく、**Bong (2011 onwards)**が提案した、**Lemmatic Properties** (意味的・統語的特性)に基づく様々な動詞と副詞辞を利用した。さらに、例文には母語の翻訳文をいれ、タスクの意味的特性を明確にした：**e.g. There is no body who can tell the twin ( )**.その双子を見分けられる人はいない。

#### 4. 研究成果

英語運用能力テスト(OPT)の結果と実験研究のタスクの結果を比較した。

Av. (N=73)	Both L1 groups: 73 subjects	JSLs (33)	KSLs (40)
18.9 (25.8%)	83 items: (OPT score ranges between 40% and 60%)	7.8 (23.7%)	11.0 (27.8%)

英語副詞辞を穴埋めするテストの結果は、他の文法運用能力の結果より比較的低いということは、英語副詞辞の運用はより難しいという主張を裏付ける。つまり、句動詞または英語副詞辞の習得は難しいことに裏付ける結果を得た。

実験結果から、正しく運用した例の頻度の最も高いものから最も低いものを比べてみた。

#### ◆ Overall Correct Frequency: Easier vs. the Most Difficult

Av. (N=73)	Both L1 groups: 73 subjects	JSLs (33)	KSLs (40)
71 (97.3%)	She put the plate (on) the table. (preposition)	32 (97.5%)	39 (97.5%)
65 (89.0%)	Jonathon got (up) at eight o'clock, and ~	29 (87.9%)	36 (90.0%)
54 (74.0%)	~ went ( out ) to work at nine o'clock.	22 (66.7%)	32 (80.0%)
52 (71.2%)	The only person we can count (on ) is you.	21 (63.6%)	31 (77.5%)
51 (66.9%)	When the oxygen supply was cut (off ), ~	21 (63.6%)	30 (75.0%)
50 (68.5%)	~ that the population explosion is slowing (down ).	19 (57.6%)	31 (77.5%)
0 (aspectual)	After ~, it took a long time to bring (around ).	0	0
0 (directional)	I will hold what you have done (against) you.	0	0
0 (?)	~ say that this university ranks (among) the top ten.	0	0
0 (directional)	Will you bring (into) the newspaper for me?	0	0
0 (aspectual)	The afternoons are set ( apart ) for games.	0	0
0 (D or ?)	~ if you can pull yourself (together).	0	0
0 (aspectual)	I would put nothing (past ) a fellow like him.	0	0
0	~ happy to show you (over) out new factory.	0	0
0	We hold ( out ) hope that there will be survivors.	0	0

前置詞・副詞辞の習得に関する意味に基づく2つの仮説((i)The prototypicality Hypothesisと(ii)The Semantic Single-Unit Hypothesis)を裏付ける結果ではない。前置詞の場合、母語の種類に関係なく、ほとんどの被験者がプロト性の最も高いとされる「位置・場所を意味する on」を正しく使用しているが、get up の場合、プロト性の最も高いものではないが、このような習得し易いという結果を得た。つまり、プロト性ではこのような習得難易度の結果は説明できない。

次に日本語母語話者と韓国語母語話者に違いがあるのかを比較した。

#### ◆ Significant Difference between JSLs and KSLs (more than 20%)

Av. (N=73)	Items	JSLs (33)	KSLs (40)
47 (64.4%)	The plane took ( off ) two hours late.	26 (78.8%)	21 (52.5%)
45 (61.6%)	The old man bent ( down )	16 (49.5%)	29 (72.5%)
43 (58.9%)	Please heat (up) the cold soup.	16 (48.5%)	27 (67.5%)
43 (58.9%)	After the boxer was knocked (down) , ~~~~~	29 (87.9%)	14 (35.5%)
40 (54.8%)	Please get ( out ) of my way!	15 (45.5%)	27 (67.5%)
40 (54.8%)	This year's Christmas party has been called ( off ).	24 (72.7%)	16 (40.0%)
39 (53.4%)	~ I want you to zoom ( in ) on her face.	9 (27.3%)	30 (75.0%)
37 (50.7%)	The success of our plan hinges (on ) the reaction of~	11 (33.3%)	25 (65.0%)
29 (39.7%)	Last night I waited (up ) for you till twelve.	18 (54.5%)	11 (27.5%)
22 (30.1%)	If you rub this cream~, it will keep mosquitoes ( away ).	4 (12.1%)	18 (45.0%)
18 (24.7%)	I was completely exhausted, I just flaked (out ).	3 ( 9.1%)	15 (37.5%)
17 (23.3%)	The new coffee shop is really pulling (in) the customer	1 ( 3.0%)	15 (37.5%)

二つの仮説ではこのような違いは説明できない。つまり、二つの異なる母語話者にとっても、英語前置詞または句動詞のプロト性、または単一意味単位であることは同じであるはずなので、習得難易度が異なることを説明することができない。つまり、この仮説では、このような実験結果を説明することができないため、頻度仮説のような ad hoc な説明が必要となるが、一般的に利用される句動詞の頻度率ではこのような結果を説明することができない。

より詳細に考察するために英語副詞辞 in の運用テストの結果を観察した。

◆ Performance on The Adverbial Particle 'in'

English Sentences		Japanese version.	JSLs	JSLs Correct	KSLs Correct	KSLs	Average Correct	Average
When you take the model's picture, I want you to zoom ( ) on her face.	in	そのモデルの写真を撮ることは、顔にズームしてほしい。	27.3%	9	30	75.0%	39	0.534
This missile automatically homes ( ) on enemy planes.	in	このミサイルは自動的に敵の飛行機にねらいを定めるようになっている。	0.0%	0	2	5.0%	2	0.027
Do you mind if I drop ( ) and see you this afternoon.	in	今日の午後ちょっとお邪魔してもよろしいですか？	36.4%	12	9	22.5%	21	0.288
The new coffee shop is really pulling ( ) the customers.	in	新しい喫茶店は本当に繁盛している。	3.0%	1	16	40.0%	17	0.233
Your speech was rambling. It did not centre ( ) anything at all.	in	君のスピーチはとりとめがなかった。まとまりが全然なかったよ。	21.2%	7	8	20.0%	15	0.205

韓国語母語話者は動詞 zoom 副詞辞 in の組み合わせのタスクには正解率 70%以上であるが、日本語母語話者は僅か 27%の正解率である。このような違いはどう説明されるべきなのかは二つの習得仮説では説明できない。「母語の違い」と「母語転移」が齎す結果だと説明するのが一般的であるが、日本語と韓国語は両方とも副詞辞を選択しない言語であり、このような習得難易度の違いは説明できない。しかし、それを説明する理論が、言語習得理論:The Minimalist Model of Language Acquisition (Bong 2005, 2009) の第二言語習得に適用した The feature reconstruction hypothesis (母語の影響、Causal Factors of the input quality: obscurity and ambiguity) はこのような misdevelopment を予測、説明することができる(奉 2005, 2009) :

**The feature Reconstruction Hypothesis: a set of lemmatic features for the Head V selected from the lexicon must agree with a set of lemmatic features for the Complement VP {{V} = {NP [PP NP] }}. L2ers must identify through their L2 input data those sets of features for each: in addition, L1 sets may obscure the constructions of L2 input (Bong 2019)**

◆ Performance on the Adverbial Particles 'on'

The only person we can count ( ) is you.	on	私たちが頼れるのは君だけだ。	63.6%	21	31	0.775	77.5%	52	71.2%
You keep ( ) asking me the same question.	on	君は同じ質問をしてばかりいるね。	48.5%	16	24	0.6	60.0%	40	54.8%
The success of our plan hinges ( ) the reaction of the enemy.	on	我々の計画がうまくいくかは敵の反応しだいだ。	33.3%	11	26	0.65	65.0%	37	50.7%
Professor Jones, would you like to remark ( ) the point the last speaker has just made?	on	ジョーンズ教授、今の発言者が述べた要点についてコメントしていただけますか。	45.5%	15	19	0.475	47.5%	34	46.6%
I can not improve ( ) the way you said it.	on	あんな言い方をされたら取り替えません。	24.2%	8	11	0.275	27.5%	19	26.0%
The doctor put the patient ( ) the medicine.	on	医者は患者に薬を与えた。	36.4%	12	7	0.175	17.5%	19	26.0%
He looked as if he was verging ( ) panic.	on	彼はまるでパニック寸前ようだった。	15.2%	5	7	0.175	17.5%	12	16.4%
The citizens must not let the government trample ( ) their rights.	on	市民は自分たちの権利を政府に踏みならはならない。	9.1%	3	8	0.2	20.0%	11	15.1%
The boss has no hesitation about piling ( ) the work.	on	上司は何のためらいもなく山のように仕事を積出す。	15.2%	5	6	0.15	15.0%	11	15.1%
If you are going to pick ( ) someone, choose someone bigger than yourself.	on	誰かをいじめるなら自分より大きいやつにしろ。	3.0%	1	6	0.15	15.0%	7	9.6%

このような実験結果から、副詞辞 on を含む句動詞(**count on, keep on, hinge on, remark on**)が、他の句動詞より習得しやすいことが判明した。さらに副詞辞 in を含む句動詞が副詞辞 on を含む句動詞より難しいように思える結果を得たが、このような結果は暫定的な結論に過ぎない。なぜならば、検証に利用された動詞は類似(同じ程度)の頻度と難易度である想定の下であるからである。つまり、頻度率に説明に依存する習得理論や仮説の難点となる実験結果であることは明確である。

実験研究結果から、研究課題の「習得難易度: The Differential Difficulty」について、句動詞ごとに異なる: 動詞と副詞辞の組み合わせの種類により習得しやすいもの、習得し難いものに分けられるが、プロト性理論と意味単一意義単位仮説では説明できず、むしろこの二つの仮説の問題点を指摘する結果を得た。次に、研究課題の「母語影響:L1 Influence・母語転移:L1 Transfer」については、既存の理論や仮説から期待される結果ではなく、むしろ、母語以外の要因があることを裏付けるような結果を得た。言い換えれば、Causal Factors の役割を導入する「reconstruction hypothesis-hypothesis testing model」を支持する実験結果を獲得した。最後に「学習可能性: Learnability」について、副詞辞を含む句動詞の学習・習得可能性は、母語にない範疇である英語副詞辞(Adverbial Particles)の学習は難しく、特に Lemmatic Properties の再構築には Causal Factors により、misdevelopment の可能性が高く、第二言語習得で再構築された「句動詞の Lemmatic Features セット」は母語話者のそれとは異なるという結論付けをした。つまり、学習は Causal Factors となり、母語話者のような心的標示(Mental Representation)は持つことはなく、中間言語(Interlanguage)または L3 を習得される。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 7件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Chung Bohyon, Bong Hyun Kyung Miki	4. 巻 74
2. 論文標題 A Study on the Relation Between Intelligibility and Attitudes	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ENGLISH TEACHING	6. 最初と最後の頁 103 ~ 123
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15858/engtea.74.2.201906.103	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 Bong, HyunKyung	4. 巻 2019
2. 論文標題 Facilitating or Impeding: Observing the Ways in which Mobile Devices are Implemented in English Education	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2019 ETAK-STEM 共同国際学術論文集	6. 最初と最後の頁 121-124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Chung, Bohyon & Bong, HyunKyung	4. 巻 1
2. 論文標題 Unintelligible Features of Korean-Accented English to Korean- and Japanese-Speakers	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 2018 ETAK Conference Proceedings: "Integrative Approaches to Develop ELT in Korea: Creativity and Intuition"	6. 最初と最後の頁 141-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する
1. 著者名 Bong, HyunKyung	4. 巻 1
2. 論文標題 Lemmatic Properties of Adverbial Particles	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 The 22nd PAAL Conference Proceedings	6. 最初と最後の頁 36-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Bong, HyunKyung	4. 巻 1
2. 論文標題 A Study on Adverbs: Really and Actually	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 2017 ETAK Conference Proceedings: English Education: Today and Tomorrow	6. 最初と最後の頁 145-153
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 奉 鉉京	4. 巻 1
2. 論文標題 English Education: Developing Inter-Cultural Communicative Competence	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 韓国英語語文教育学会 2016 国際大会論文集 : English Education in the Multicultural Era.	6. 最初と最後の頁 61-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 奉 鉉京	4. 巻 1
2. 論文標題 Roles of Causal Factors and L1 in the SLA of English Prepositions	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 環太平洋応用言語学会国際大会発表論文集PAAL International Conference Electronic-Proceedings	6. 最初と最後の頁 A1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

1. 著者名 Bohyon Chung & 奉 鉉京	4. 巻 23(1)
2. 論文標題 A Study on the Perception of Korean EFL Learners on Four Native Varieties of English Accents	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 English Language & literature Teaching, Vol 23(1).	6. 最初と最後の頁 17-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

[学会発表] 計19件(うち招待講演 1件/うち国際学会 18件)

1. 発表者名 Bong, HyunKyung
2. 発表標題 Differential Difficulty in the L2A of English Phrasal Verbs
3. 学会等名 The 29th International Conference of EUROSLA (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Chung, Bohyon & Bong, HyunKyung
2. 発表標題 What will learning/teaching world-English(es) be like in the future?
3. 学会等名 The 24th Conference of IAWE (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Bong, HyunKyung & Tsuzuki, Masako
2. 発表標題 Transcendent Cultural and Linguistics Creativity in the First Generation Migrant Author, Observing English from a Slight Distance
3. 学会等名 The 24th Conference of IAWE (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Bong, HyunKyung
2. 発表標題 Facilitating or impeding: Observing the Ways in which Mobile Devices are Implemented in English Education
3. 学会等名 The ETAK-STEM Joint International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年



1 . 発表者名 Chung, Bohyon & Bong, HyunKyung
2 . 発表標題 The feature Reconstruction Hypothesis: a set of lemmatic features for the Head V selected from the lexicon must agree with a set of lemmatic features for the Complement VP [{V} = {NP [PP NP] }]. L2ers must identify through their L2 input data those sets of features for each: in addition, L1 sets may obscure the constructions of L2 input.
3 . 学会等名 The 39th International Conference of Thailand TESOL ( 国際学会 )
4 . 発表年 2019年

1 . 発表者名 Chung, Bohyon & Bong, HyunKyung
2 . 発表標題 Unintelligible Features of Korean-Accented English to Korean- and Japanese-Speakers
3 . 学会等名 The English Teacher Association in Korea & English Teaching Research Association in Korea ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Bong, HyunKyung & Chung, Bohyon
2 . 発表標題 The Intelligibility of Various English Accents to Japanese EFL Learners
3 . 学会等名 The 11th International Conference of English as a Lingua Franca (ELF11) at King's College London ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Chung, Bohyon & Bong, HyunKyung
2 . 発表標題 Intelligibility of Korean-Accented English Using Voice Recognition Programs
3 . 学会等名 The 11th International Conference of English as a Lingua Franca (ELF11) at King's College London ( 国際学会 )
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Tsuzuki, Masako & Bong, Hyunkyung
2. 発表標題 Use of Really & Actually by Japanese speakers of English: Based upon the Corpus Data of English Spoken by Japanese
3. 学会等名 The 11th International Conference of English as a Lingua Franca (ELF11) at King's College London (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Bong, Hyunkyung & Tsuzuki, Masako
2. 発表標題 A Study on the Uses of Adverbs (Really & Actually) and Adverbial Particles (Up & On)
3. 学会等名 The 13th Teaching and Language Corpora (TALC 2018) Conference at Cambridge University (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chung, Bohyon & Bong, HyunkYung
2. 発表標題 The Attitudinal Effect on Identifying Barriers of Korean-Accented English Communication: Using ASR-Based Mobile App
3. 学会等名 The 2nd Women in TESOL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Chung, Bohyon & Bong, HyunkYung
2. 発表標題 Automatic Speech Recognition for Evaluating Korean-Accented English: Gender Differences in Intelligibility and Perception
3. 学会等名 The 39th Thailand TESOL International Conference (国際学会)
4. 発表年 2019年

1 . 発表者名 Chung,Bohyon & Bong, HyunKyung
2 . 発表標題 A Study on Perception of Korean-Accented English
3 . 学会等名 GlobELT 2017 Conference: An International Conference on Teaching and Learning English as an Additional Language ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Bong, HyunKyung & Chung, Bohyon
2 . 発表標題 The Attitudes of Japanese and Korean EFL Learners toward Four Native Varieties of English
3 . 学会等名 The 22nd Conference of the International Association for World Englishes (IAWE) ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Chung,Bohyon & Bong, HyunKyung
2 . 発表標題 Perception and Judgement on English Accent by Korean Learners of English
3 . 学会等名 The 22nd Conference of the International Association for World Englishes (IAWE) ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

1 . 発表者名 Bong, Hyunkyung
2 . 発表標題 Lematic Properties of English Adverbial Particles
3 . 学会等名 The 22nd International Conference of Pan-Pacific Association of Applied Linguistics (PAAL) ( 国際学会 )
4 . 発表年 2017年

1. 発表者名 Bong, Hyunkyung & Tsuzuki, Masako
2. 発表標題 A Study on Adverbs: Really and Actually
3. 学会等名 2018 English Teachers Association in Korea (ETAK) Annual Conference (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 奉 鉉京
2. 発表標題 English Education: Developing Inter-Cultural Communicative Competence
3. 学会等名 E T A K (English Teachers Association in Korea) (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 奉 鉉京
2. 発表標題 Roles of Causal Factors and L1 in the SLA of English Prepositions
3. 学会等名 P A A L (PanPacific Association of Applied Linguistics) (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	加藤 鉉三  (KATO KOZO)  (20169501)	信州大学・学術研究院総合人間科学系・教授    (13601)	